

歴史の弱さと神話の矛盾 ——『行け、モーセ』におけるキャスとアイクの対話

丸谷 徳嗣

はじめに——「アメリカ」から「南部」へ

William Faulknerの作品のなかで、“The Bear”ほどアメリカ的な自然の物語として議論の俎上に載せられてきたものはないだろう。「熊」が収められた*Go Down, Moses*が出版された1942年は、コロンブスによるアメリカ大陸発見以来450年の節目であったから、フォークナーがこの作品を執筆するに際して自国の歴史にたいしてなんらかの言及をしたと考えるのは、とりたてて不自然なことではないのかもしれない。実際、「熊」の第4章でMcCaslin (Cass) EdmondsとIsaac (Ike) McCaslinは、「新大陸の発見」を口にしてもいるのだ(247)。また、Joseph Blotnerによると(*Faulkner* 1054)、『モーセ』執筆当時フォークナーは娘のJillに、自身がアメリカ文学における5人の偉大な作家として挙げているHerman Melville (*Meriwether and Millgate* 167)の*Moby Dick*を読み聞かせていたという。

しかし足元に目を転じてみれば、アメリカ南部のアイデンティティの探求には、「アメリカ」の「無垢」な自己を信頼するという思想的文脈において奴隷制という罪悪といかに向き合うかという葛藤があった(Woodward 19-25)。さらに文学に関して言えば、Louis P. Simpsonが示してみせたように、北部においてはエデンの楽園に見立てるヴィジョンとして齟齬なく機能した「新世界」の荒野への反応は、南部においては奴隷制という反牧歌的なシステムを牧歌的な庭のヴィジョンへ接続するための葛藤を経なければならなかったという個別の事情が、この作品には認められもする(39; see also 61)。

「白人と黒人の関係」を主題とする『モーセ』(Blotner, *Selected* 139)という一冊の本に収められた「熊」にも、当然このような南部的な葛藤が内包されている。その担い手となるのが、キャスとアイクである。つまり実のところ、アメリカ的な自然の神話は『モーセ』の「熊」の特質であるわけではないのである。それはむしろ、第4章を持たない*Big Woods* (1955)の「熊」によくあてはまるだろう。この短編集およびそこに収められた「熊」は、90年代以降とりわけエコ・クリティシズムあるいはネイチャー・ライティングの視座から議論されてきたが、『大森林』への「書き直し」は、『モーセ』の人種問題から、文明によって破壊され崩壊する「自然」への挽歌、あるいはほとんど文明批判へと、その主題的変遷をたどるとされている(Pittman 476, 495)。すな

わち、『モーセ』において自然の神話に侵入し、台帳の記述とキャスとアイクの対話によって歴史と現実を持ち込むのが、ほかでもない「熊」の第4章なのである。それだけならば形の整ったアイクの自然の物語に南部の歴史認識を持ちこむのが、キャスという人物であるということだ。すなわち逆に言えば、副題が示す「狩猟物語」としての『大森林』においては、「熊」の第4章は重要性を持たなかった、あるいはほとんど不必要でさえあったのである (Low 56)。フォークナー自身、ヴァージニア大学でのインタビューで、単体の作品として読むのであれば第4章は飛ばすように、と言っている (Gwynn and Blotner 273)。

構造的にも、「熊」全体の半分程度の長さを持つこの章は、中編小説としての均整のとれた物語を「分断する」 (Lydenberg 665; Stonesifer 693)。一族の台帳によって明かされるのは白人による黒人の搾取であり、「奴隷制のもとではなんらかのかたちであらゆる場所で起こった」という人種混交 (Williamson 384) と近親相姦の罪である。また、『モーセ』の登場人物の名前や台帳の語彙・スタイルなどが、実在したフォークナーの友人 Francis Terry Leak の日記をもとにしている可能性が、Sally Wolff によって指摘されてもいる (29-47)。

実際、『モーセ』に組み入れられることになる短編小説群は、早期の着想段階にあたる “Was” と “The Old People” など若干の例外をのぞいて、その大部分が 1940 年に制作されており、また 41 年の構想にはそもそも「熊」はまだ含まれていない。同年中ごろからすでに雑誌に掲載されていたこれらの短編の加筆・訂正と並行してようやく「熊」が執筆されるが、第4章はさらにその最後の段階に、『モーセ』を一冊の「小説」にまとめるという意図のもとで製作されている。¹したがって「熊」は、あるいは『モーセ』全体が、ひとつには、本質的にそこで展開されるキャスとアイクの対話にかかわるものであるといっても過言ではない (Kartigater, 134) だろう。

このように考えれば、『モーセ』という作品を扱うに際して、「熊」の第4章がとりわけ重要であることがわかるだろう。「熊」に南部の歴史意識や現実認識をみる「ロマンティックでない」読みは、「第4章の痛烈なアイロニー」 (Perluck 174) がさしはさまれているときにこそ可能なのだ。この箇所は2つの主要な部分で成り立っている。ひとつは台帳——「土地全体の縮図であり、それを倍加してつなぎあわせれば、降伏後 23 年、奴隷解放宣言後 24 年の、南部全体の縮図となる年代記」 (Faulkner, *Moses* 280)——であり、いまひとつが、遺産相続をめぐるキャスとアイクの対話である。本論文では、このうちこれまであまり議論されることがなかった後者に着目し、おもに歴史的・文化的な観点から、『モーセ』における南部的な自我の葛藤について考察する。まず第1節では、『モーセ』全体をアイクの物語としてとらえ、彼の遺産相続の拒否という行為が共同体的な自我の放棄にほかならないことを手短かに確認する。第2節では、アイクを批判するキャスがどのような思想を持っているのかを、Sam Fathers に対する 2 人の態度を分析することを通じて明らかにする。最後に、彼らの立場の違いが作者の南部的自我の葛藤の体現であることを示すのが、第3節の目的である。

1. アイクと南部的自我

『モーセ』という一冊の本は、幼少期（あるいはそれ以前）から青年期を経て老年に至る主人公アイクの物語であるが、彼の自我には同時に、マッキヤスリン一族の、さらにはアメリカ南部の全体の歴史が重ね合わされている。この共同体の歴史としての自我は、アイクの「ほんもの」の自我²の所在を示唆する。彼の人生における大きな転機となる遺産相続の拒否について、その理由を説明するなかでアイクはキャスに次のように語る――

And I know what you will say now: That if truth is one thing to me and another thing to you, how will we choose which is truth? You don't need to choose. The heart already knows. ... Because the men who wrote his Book for Him were writing about truth and there is only one truth and it covers all things that touch the heart. (Faulkner, *Moses* 249)

一族の罪ひいては南部全体の罪の歴史を一身に引き受けるようにして、自身を神に選ばれた者であるとする自己認識が、遺産相続の拒否という彼の選択を下支えするのだ。彼にとって神はつまり、みずからの責任をとるために彼を選ばれたのである――“an Isaac born into a later life than Abraham's and repudiating immolation: fatherless and therefore safe declining the altar because maybe this time the exasperated Hand might not supply the kid” (271)。

だが、アイクのヴィジョンは皮肉にも彼を共同体的な出自から切り離すことになる。彼の遺産拒否は、神秘的な大鹿の目撃やサムたちとともに過ごした森での狩猟生活、Old Ben との邂逅、つまりは自然の世界における体験と密接に関係している。森の中で狩りをするのは、サムや Major de Spain、General Compson といった先達によって構成される「男」の共同体への参入を意味するが、同時に「母」なる自然に身を置くことでもある。とりわけ銃や時計やコンパスといった文明の利器を棄てることでオールド・ベンに出遭う神秘的な体験は、「父」の世界を拒絶し「母」なる自然に向かうアイクの人生を予見させる。このような意味で、自然は彼の「自己消失」の場であり (Fowler 149)、遺産相続の拒否は彼の「自己否定」の所作となる (138)。

しかしながら、アイクの選択を「逃避だ」と非難するキャスも、少年時代には彼自身が「昔の人たち」の最後で口にするように、アイクと同様のイニシエーションや神秘的な体験を経ている (Faulkner, *Moses* 180)。そもそも上に引いたアイクの「真実」についての言及は、ある回想場面で明かされるように、この時点から7年前に John Keats の詩を引用しつつ、キャスがアイクに語って聞かせたものである。つまりところやはり彼らは非常に似通っていて、実質的には南部というおなじコインの表裏をなすの

である (Millgate 207)。

それでもキャスは、遺産相続の拒否をめぐってアイクと対立する。Donald M. Kartiganerは、「アイクは神話的なヴィジョンをほかの誰とも共有していない」(134)と述べているが、キャスこそは、アイクの思考を理解するとは言わないまでも、彼に共感できてしかるべき人物であるだろう。もちろん彼らがそれぞれ置かれた状況の違いは、まずはLucius Quintus (Old) Carothers McCaslinが人種混交と近親相姦の罪を犯していたという一族の「歴史」をアイクのみが事実として知っているという点に求められるだろう。彼は台帳からこの「事実」を知るのであるが、Noel PolkとRichard Goddenが精緻な読みから明らかにしたように、彼は自身の必要に応じて歴史を解釈し物語を構築しているのであり、そこから信憑性や事実、真実と呼べるものをさえ、引き出している。それはすでに触れたように、先行する森での体験によるものであるが、彼が聖書に言及しながら口にする自己認識についてもあてはまる。彼が構築する物語がマッキャスリン一族の歴史であり彼自身の歴史である以上、アイクが我知らずとる行為は、ほとんど彼の自己解釈なのだ。次節では、それに対してキャスがどのように反応しているのかを分析することで、2人の立場の違いについて考察してみたい。

2. サム・ファーザーズとハムの神話

2人の対話が展開されるのは「昔の人たち」と「熊」の第4章においてであるが、キャスがアイクに説いて聞かせる言葉は主にハムの神話にまつわるものである。これは旧約聖書「創世記」の第9章20～27節にあるNoahの息子たち——Shem、Ham、Japheth——の挿話に基づいている。ぶどう酒を飲み天蓋のなかで裸のまま眠っていた父の姿を見たハムがそのことを2人の兄弟に告げると、セムとヤベテは父の裸を見ないようにして着物で身体を覆う。父の裸を見たハムの息子Canaanはノアに呪われ、セムの奴隷となるよう運命づけられる、という筋書きであるが、Thomas Virgil Petersonの*Ham and Japheth: The Mythic World of Whites in the Antebellum South* (1978)によるとこの神話は、旧南部においては歴史的に奴隷制度を正当化する宗教言説として機能してきた(32)。ヤベテ、ハム、セムはそれぞれ白人、黒人、ネイティヴ・アメリカンの原型としてとらえられ、マニフェスト・デスティニーの文脈で神の使命を推し進めるべく、予型論として利用されてきたというのである(9-8; 42-43; 91; 97-98)。

旧南部では、ハムがこのような呪いを受けたのは父ノアを辱めたためであると考えられていたという(49)が、Stephen R. Haynesが*Noah's Curse: The Biblical Justification of American Slavery* (2002)で示してみせたように、「創世記」のこの箇所は同時に、南北戦争以前に南部では「名誉」と結びつけて解釈されてきたという歴史がある。つまり、奴隷制度をもっとも重要な秩序であると考えていた多くの南部男性たちは、みずからをノアの系譜に連ね、家長として白人と黒人の家族からの敬意を、「名誉」として求めていたのである(79)。黒人も含めた家族との関係を基盤とする南

部白人の「名誉」は、奴隷制度を正当化するハムの神話に根本的・本質的に依存していたのだ。

「昔の人たち」においてキャスはアイクにむかって、サム・ファーザーズの混血の事実について、以下のように説く——黒人の血が流れていることを彼の表情に感じ取らせるものとは、「ハムから受けついだものではなく、奴隷のしるしではなく囚われの身のしるしであり、しばらくの間自分の血のその部分が奴隷の血となってきたにすぎないという認識にほかならない」のだと。そうして彼は、サムを「檻に閉じ込められた老いたライオンか熊」に喩える (Faulkner, *Moses* 161)。Eric J. Sandquist は、『モーセ』においては全体をつうじて白人と黒人、奴隷所有者と奴隷、狩猟者と獲物といった関係にアナロジカルなつながりがあることを指摘している (140) が、同じようなことはサムのアイデンティティについても言うことができる。すなわち、サムを神話的な人物として崇拝するアイクは、実のところ旧南部において一般的であったハムの神話のヴィジョンを受け入れているのと同断なのであり、キャスはアイクに、そのようにして神話を口実にサムを崇めることを戒めている。そうすることは無知であり、差別を差別と意識せずに持ち続けるということだからだ。実際アイクは、「サム・ファーザーズが僕を自由にしてくれたんだ」 (Faulkner, *Moses* 286) と言いながら、この神話的人物に倣って自然の精神を糧に、社会に背を向けてさながらキリストのように生きていくことを選ぶ。このように、白人と黒人とインディアンの血を分かち持つサムは、まさにハムの神話を具現化した人物なのだ。

だからこそ、サムに対するキャスとアイクの態度は、彼らの黒人差別に対する自意識を雄弁に物語ってくれる。ピーターソンは南北戦争以前の人種主義的な姿勢は結局のところ宗教的なものではなかったと述べ、同時にキリスト教の文脈における白人と黒人の兄弟という関係が南部式のハムの神話がはらむ矛盾に気付かせてくれると述べている (95)。「じゃあじいさんを放してやればいいじゃないか!・・・檻から出してやりなよ!」と言うアイクに対して、キャスは「短く笑い」、「じいさんの檻はマッキャスリンじゃないんだよ」と答える——

He was a wild man. When he was born, all his blood on both sides, except the little white part, knew things that had been tamed out of our blood so long ago that we have not only forgotten them, we have to live together in herds to protect ourselves from our own sources. (Faulkner, *Moses* 161)

この台詞で問題となるのは、キャスの言う「われわれ (白人) の血からはずっと昔にすっかり薄められてなくなってしまったもの」とはいったい何なのか、ということである。ハムの神話を参照するなら、「自分たち自身の源泉」とはハムとヤペテ、すなわち白人と黒人が兄弟であるという神話の記述への言及であると考えられるだろう。さらに、

「われわれ自身を守るためにいやしい群れをなして生きていかなくちやならないのだ」という箇所ではしたがって、キャスがこの神話の、つまりは黒人差別にまつわる自分やアイクを含めた南部白人全体の矛盾を突いているのだと考えられる。すなわち、キャスの言う「白人の血からはずっと昔にすっかり薄められてなくなってしまったもの」というのは、「名誉」の否定である「恥辱」となるべき記憶、白人が黒人と兄弟であるという「神話」が彼らにもたらす「恥辱」であると推測される。言い換えるなら、「われわれ白人は、南部人の名誉にとって都合が悪いから、彼ら黒人がもともとは血を分かち合った兄弟であるということにはすっかり蓋をして、なかったことにしてしまおうとしているにすぎない」と彼は言っているのだ。

たしかに、Eleanor Cookが指摘している(702)ように、『モーセ』には聖書神話を下敷きにした白人と黒人の兄弟というモチーフが散見される。黒人の乳兄弟との関係を作中でもっとも明確に担うCarothers (Roth) EdmondsとHenryのほか、実際に老キヤロザーズと血をわけた兄弟であるTomey's TurlとBuck, Buddyの双子は言うに及ばず、彼の父であるZackery (Zack) Edmondsも、Lucas Beauchampとは「年齢という点では兄弟、ほとんど双子であると言ってよかった」(Faulkner, *Moses* 46)し、彼らは現実に「ほとんど兄弟のように」(54)子供時代をともに過ごしたとされる。また、目下われわれの関心の対象であるアイクについても、明示されているわけではないがほとんど年齢がおなじであるTennie's Jimとは、ザックとルーカスやロスとヘンリーと同様、ほとんど兄弟のようにして黒人の乳母に育てられたと考えられる。

キャスの批判は、「罪」と「恥辱」という意識の混同に向けられていると言ってもいいだろう。原理的には、良心／罪という感覚は名誉／恥辱とおなじではない。前者がキリスト教由来の価値観であるのに対して、後者は社会の伝統に属する。すなわちキャスの批判を換言すれば、南部白人は後者の論理を前者にすり替え、そうすることで神秘化し、自己防衛してきたのである。良心とは個別的な行動についての善し悪しであり、たとえ社会がある行為を深刻にとらえなかったとしても、それをした人物は良心の呵責・罪の意識に苛まれることがある。それに対して恥辱とは、共同体の価値観の内面化を意味する「名誉」の損失であり、個人と社会の感覚が合致したものである。つまり名誉を損失し恥辱をあげようことは、個人の内面の問題というよりは、社会や他人からの全人的な存在否定を意味するのであり、とりわけ弱さを露呈するときにはひとは恥辱の烙印を押される。具体的には、他人に背中を向けたり、人前で一糸まとわぬ姿になったりしたときに、この感覚は発動する(Wyatt-Brown 155-56)。ハムがノアを辱めたとき、南部において創世記第9章20～27節が名誉との結びつきで解釈されてきたのは、このことによる。

さらに「熊」の第4章では、「身分の卑しい人間たち」をすくなくともいくらか自由にするために神さまは3世代の人たちが必要だと考えた、と語るアイクにキャスは、「ハムの息子たちだよ。おまえ、聖書を引用するなら、ハムの息子たちと言うべきところだろう」と口を挟む。それに対してアイクは、「聖書には、神さまが言ったことも、

言わなかったこともあるんだよ」と言い訳めいた答え方をするのだが、「昔の人たち」で一度キャスがハムの神話を暗に非難する言葉を口にしていただけを合わせて考えると、キャスはここでのやりとりでも同様に皮肉を込めて発言していることがうかがえるだろう (Faulkner, *Moses* 248-49)。つまり、Jessie McGuire Coffeeが言うように、「キャスは、聖書が黒人をハムの息子だと言っているのだから、黒んぼたちは過ちに対して償いを受ける価値などないのだと言っている」(91)のではない。また同様に Joanne V. Creighton が述べるように、この言葉が「聖書によると神が奴隷制度を認めたのだというキャスの脆弱な議論」を示唆する(129)わけでもない。これらはともに、「昔の人たち」で彼がサム黒人の血は「ハムから受けついでものではない」と言っていたことと食い違ふだろう。キャスは、あくまで神の意志にしたがうという姿勢をとるアイクに、彼の立場を貫いて聖書を字義通りに解釈するのであれば、黒人たちはハムの血を受け継ぐということになるのだから、やはり永久に奴隷であるほかないのではないか、つまり彼の言っていることは聖書の記述と矛盾するのではないか、と問うているのである。これに対してアイクは、「聖書を書いた人たちは、ひとびとが『心で』読むために、いつも真実を書いたわけではないのだ」と答えてはいるのだが、これはほとんど苦しまぎれの切り返しなのだ。

3. キャスと「現実」への弱さ

このように、キャスはアイクを、ひいては南部白人の黒人に対する自意識が孕む矛盾をえぐる問いを発する。キャスの批判は、もちろん彼自身にもあてはまる。また自身の「名誉」を主張しながら Fonsiba との結婚を「報告」しにやってくる北部出身の黒人牧師を、ヒステリックな態度で追い返してしまうという挿話 (Faulkner, *Moses* 262-64) が、彼の差別意識を証明している。彼はまた、アイクが口にする黒人の美德を「犬でも持っている」とさえ言うのである(282)。だが、彼はアイクのように実際になにか行動しようとするわけではない。このことは、「罪」を自覚しながらもあくまで最終的には共同体の規範の方に軸足を置いて生きてこうとする彼の姿勢を示していると言っていだろう。老キャラーズが犯した「罪」をキャスはおそらく知らないが、マックスリン家の白人による黒人の搾取がなかったと考えるほど、彼はナイーブでもない。何人も「歴史」からは逃れることなどできず、何をしようと矛盾は解消しないのだから、目の前に与えられた状況を受け入れて生きるしかない、というのが、彼の基本的なスタンスであると考えられる。

それに対してアイクは、森での神秘的な体験から「自由」を求めて共同体を離れていく。しかしながら続く「デルタの秋」で明かされるように、ロスとその愛人によって老キャラーズの「罪」の歴史が繰り返されていたという事実が、老年を迎えた彼を絶望させてしまう。アイクの信じた「神話」は、南部と一族の「歴史」によって瓦解させられるのである。もちろんアイクも、マックスリン家の遺産を放棄すれば一族の罪その

ものがなかったことになるなどという「無垢」な考えを持つてはいなかっただろう。「デルタの秋」で「アイクおじさん」の人生が回想される場面では、結局は生まれることはなかったもの、せめて自分の息子だめでも「罪」の歴史から自由にしてやりたかったと考えたことが、遺産相続拒否の動機として語られている(334-35)。

ふたりはこのように、それぞれ歴史と神話を足掛かりにして「南部」の問題に対峙するが、作者はどのような立場をとっていると考えられるだろうか。フォークナーはヴァージニア大学のインタビューで、アイクが遺産相続を放棄した状況には、自らが調和できるような人間性を見いだせない近代人の苦悩と同じものがあると思うか、と問われて、次のように応えている。

Well, there are some people in any time and age that cannot face and cope with the problems. There seem to be three stages: The first says, This is rotten, I'll have no part of it, I will take death first. The second says, This is rotten, I don't like it, I can't do anything about it, but at least I will not participate in it myself, I will go off into a cave or climb a pillar to sit on. The third says, This stinks and I'm going to do something about it. McCaslin is the second. He says, This is bad, and I will withdraw from it. What we need are people who will say, This is bad and I'm going to do something about it, I'm going change it. (Gwynn and Blotner 245-46)

ここで彼がアイクの行為を批判的にとらえていることは明らかである。しかし、キャスがこの「3つの段階」のどれにも当てはまらないこと、すなわち彼が現実の問題に対して何もしない人物であることを思えば、作者が『モーセ』においてキャスとともにただアイクを批判的に眺めているとは考えられないだろう。むしろ、フォークナーが言う「3つ目の段階」、問題に対して現実的に何かを変革していこうとするところに至る前段階として、アイクの遺産相続放棄はあると言えるのではないだろうか。

おわりに——歴史と神話の間で

ハムの神話の矛盾をつき、南部白人の「恥辱」を指摘するキャスの視点と「南部」という共同体の価値観の間には一定の距離があると言っていい。つまり彼は相対主義者なのであり、ある意味では作者の立場にもっとも近い人物なのだろう。もちろんすでに述べたように、キャスは自分が黒人への差別南部意識を含むイデオロギーを免れているなどとは考えていない。遺産相続を申し出るアイクに、「おれはおれ以外のなにものでもない。おれはずっと生まれたままのおれであり続けるだろうし、これまでずっとそうだったんだ」と言い放つとき、同時に彼の立場が歴史主義であることは明らかだ。他方

で、アイクの立場が神話主義的であることも同様に明らかだろう。Dirk Kuykは「ハムの息子だよ」というキャスの言葉を「皮肉な返答」としながら、これが聖書の記述を否定する方向へアイクを導くと述べている(113)が、聖書を「『心で』読むため」のものであると主張する彼の立場は、南部の社会が奴隷制を正当化するために利用してきた「解釈」よりも、はるかにナイーヴなものである。実際「サムが僕を自由にしてくれたんだ」と言う彼は、この神話的人物に倣って自然の精神を糧に、社会に背を向けてさながらキリストのように生きていくことを選ぶのだ。大工という職業が森を食物にするという皮肉はもとより、サムがハムの神話のいわば具現化として機能していたことを考えるなら、まさにキャスが指摘するように、黒人に対する意識という点においてもアイクの選択は当然いかんともしがたい矛盾を抱えることになるはずだろう。

2人の対話で明らかなのは、アイクが森での経験にしたがって「自由」を口にしつつ拒否しようとしたのはほかでもない南部の伝統のなかではぐくまれた彼自身の自我であったということだ。このようにみれば、共同体から自己を切り離して森の中へ「逃避」するアイクに比べて、キャスという人物の視点のはるかに成熟したものであるということ、少なくとも彼の視野のほうのはるかに広く、認識としても深いということがわかるだろう。しかしながら、最終的にはキャスも、それに対してはなにも決定的なことは言えない。彼にできるのはせいぜい彼もアイクと同じように相手の立場を「拒否」することぐらいである(Faulkner, *Moses* 286)。おなじ「罪」と「恥辱」の文化の中で育ち、そのことを知悉している彼には、アイクをとどめるだけの論理も理由も、なかったのかもしれない。相対主義であるという意味において、キャスの歴史主義は脆弱なのだ。このような状況——脆弱な歴史主義と矛盾をはらむ神話主義——こそ、『モーセ』という小説が呈示する、根源的な問題なのである。

注釈

¹ See Gresset 61-62, Blotner, *Selected* 139-41, Skei 98, Faulkner, *Uncollected* 690-96.

² Charles Taylorは、Lionel Trillingの「ほんもの」の自我の概念(93)を、相対的によりよい生とはいかなるものかを「安易な相対主義」(*The Ethics* 13)に墮することなく叙述するための「道徳的理想」(15-16)として掲げている。テイラーによると、「わたしが誰であるかを知ることはわたしがどこに立つのかを知ることの一種」(*Sources* 27)であり、「自我」の認識は、歴史に基づいた自己理解と社会の他の構成員との対話を通じてこそ、獲得される(28-29)。したがって、ある人間の自我の物語を語るためには、歴史的時間や地理的空間、個別的な経験を他人と共有する「社会」が必要となるのである。

引用文献

- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. 2 vols. New York: Random House, 1974. Print.
- , ed. *Selected Letters of William Faulkner*. New York: Vintage, 1978. Print.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*. 1978. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1990. Print.
- Claridge, Henry, ed. *William Faulkner: Critical Assessments*. Vol.3. East Sussex: Helm Information, 1999. Print.
- Coffee, Jessie McGuire. *Faulkner's Un-Christlike Christians: Biblical Allusions in the Novels*. Ann Arbor: UMI Research P, 1971. Print.
- Cook, Eleanor. "Reading Typologically, for Example, Faulkner." *American Literature* 63 (1991): 693-711. Print.
- Creighton, Joanne V. *William Faulkner's Craft of Revision: The Snopes Trilogy, The Unvanquished, and Go Down, Moses*. Detroit: Wayne State UP, 1977. Print.
- Faulkner, William. *Big Woods: The Hunting Stories*. 1955. New York: Vintage, 1994. Print.
- . *Go Down, Moses*. 1942. New York: Vintage, 1990. Print.
- . *Uncollected Stories of William Faulkner*. 1979. Ed. Joseph Blotner. New York: Vintage, 1997. Print.
- Fowler, Doreen. *William Faulkner: The Return of the Repressed*. Charlottesville: UP of Virginia, 1997. Print.
- Godden, Richard, and Noel Polk. "Reading the Ledgers." *Mississippi Quarterly* 55.3 (2002): 301-59. Print.
- Gresset, Michel. *A Faulkner Chronology*. Trans. Arthur B. Scharff. Jackson: UP of Mississippi, 1985. Print.
- Gwynn, Frederick L., and Joseph L. Blotner, eds. *Faulkner in the University*. Charlottesville: UP of Virginia, 1995. Print.
- Haynes, Stephen R. *Noah's Curse: The Biblical Justification of American Slavery*. Oxford: Oxford UP, 2002. Print.
- Kartiganer, Donald M. *The Fragile Thread: The Meaning of Form in Faulkner's Novels*. Amherst: U of Massachusetts P, 1979. Print.
- Kuyk, Dirk, Jr. *Threads Cable-Strong: William Faulkner's Go Down, Moses*. Lewisburg: Bucknell UP, 1983. Print.
- Low, Matt. "'The Bear' in Go Down, Moses and Big Woods: Faulkner's (Re)visions for a Deeper Ecology." *Mississippi Quarterly* 62.1-2 (2009): 53-70. Print.
- Lydenberg, John. "Nature Myth in Faulkner's 'The Bear.'" Claridge 664-72.
- Meriwether, James B., and Michael Millgate, eds. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner*. Lincoln: U of Nebraska P, 1968. Print.
- Millgate, Michael. *The Achievement of William Faulkner*. 1963. Athens: Georgia UP, 1989. Print.

- Perluck, Herbert A. "The Bear': An Unromantic Reading." *Religious Perspectives in Faulkner's Fiction: Yoknapatawpha and Beyond*. Ed. J. Robert Barth, Notre Dame: U of Notre Dame P, 1972. 173-98. Print.
- Peterson, Thomas Virgil. *Ham and Japheth : The Mythic World of Whites in the Antebellum South*. Metuchen: American Theological Library Association, 1978. Print.
- Pittman, Barbara L. "Faulkner's *Big Woods* and the Historical Necessity of Revision." *Mississippi Quarterly* 49.3 (1996): 475-95. Print.
- Simpson, Lewis P. *The Dispossessed Garden: Pastoral and History in Southern Literature*. 1975. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1983. Print.
- Skei, Hans H. *William Faulkner: The Short Story Career*. Oslo: Universitetsforlaget, 1981. Print.
- Stonesifer, Richard J. "Faulkner's 'The Bear': A Note on Structure." *Claridge* 693-99.
- Sundquist, Eric J. *Faulkner: The House Divided*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1983. Print.
- Taylor, Charles. *The Ethics of Authenticity*. Cambridge: Harvard UP, 1991. Print.
- . *Sources of the Self: The Making of the Modern Identity*. Cambridge: Harvard UP, 1989. Print.
- Trilling, Lionel. *Sincerity and Authenticity*. Cambridge: Harvard UP, 1971. Print.
- Williamson, Joel. *William Faulkner and Southern History*. New York: Oxford UP, 1993. Print.
- Wolff, Sally. *Ledgers of History: William Faulkner: an Almost Forgotten Friendship, and an Antebellum Plantation Diary*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2010. Print.
- Woodward, C. Vann. *The Burden of Southern History*. 1960. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2008. Print.
- Wyatt-Brown, Bertram. *Southern Honor: Ethics and Behavior in the Old South*. 1982. Oxford: Oxford UP, 2007. Print.